



Title	交替劇とバイカル・シベリアの旧石器資料
Author(s)	長沼, 正樹
Citation	交替劇 考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究 A01班2010年度研究報告, 1, 70-74
Issue Date	2011-08-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59513
Type	report
File Information	Naganuma2011_Baikal Siberian.pdf



[Instructions for use](#)

交替劇

「こうたいげき」

考古資料に基づく
旧人・新人の学習行動の
実証的研究 1

A 0 1 班 | 2 0 1 0 年 度 | 研 究 報 告

文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2010-2014

西秋良宏 編

研究組織

[研究項目A01]

「考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究」

2010年度研究組織

研究代表者	西秋良宏 (東京大学総合研究博物館・教授・先史考古学)*
研究分担者	加藤博文 (北海道大学文学研究科・准教授・北ユーラシア考古学) 門脇誠二 (東京大学総合研究博物館・特任助教・西アジア考古学)
連携研究者	小野 昭 (明治大学黒耀石研究センター・センター長・ヨーロッパ考古学) 大沼克彦 (国士舘大学イラク古代文化研究所・教授・石器技術研究) 松本直子 (岡山大学社会文化科学研究科・准教授・認知考古学)
研究協力者	佐野勝宏 (東北大学文学研究科・助教・ヨーロッパ考古学) 仲田大人 (青山学院大学文学部・講師・旧石器考古学) 長井謙治 (日本学術振興会・特別研究員・石器技術研究) 長沼正樹 (北海道大学文学部・学術研究員・シベリア考古学) 近藤康久 (東京大学総合研究博物館・特任研究員・考古情報学)
海外共同研究者	Olaf Jöris (ドイツ・ローマ・ゲルマン中央博物館旧石器時代研究部門・旧石器考古学・研究員)

*所属と職名は2010年度研究発足時。
本文中は2011年8月現在の所属。

目次 Contents

交替劇

A01班 | 2010年度 | 研究報告

はじめに 西秋良宏 i

座談会 1ネアンデルタール人を語る —考古学と脳科学の対話 1
西秋良宏・田邊宏樹・小野昭・三浦直樹・長井謙治・星野孝総**研究報告 39**考古学的証拠にもとづく先史人の学習行動研究—2010年度取り組み— 西秋良宏 39
旧石器人の学習と石器製作伝統—レヴァント地方の事例研究に向けて— 門脇誠二 41
ステージ3プロジェクトの到達点 佐野勝宏 47
シベリアにおける旧人・新人遺跡 加藤博文 51
交替劇関連遺跡・石器製作伝統データベースNeander DBの設計 近藤康久 55
石鏃製作実験を通して考える学習のプロセス 長井謙治 61
日本の石器研究と学習 仲田大人 65**雑報 70**

交替劇とバイカル・シベリアの旧石器資料 長沼正樹 70

班会議等 75

交替劇とバイカル・シベリアの旧石器資料

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 長沼正樹

1. はじめに

イルクーツク大学を中心とする、バイカル・シベリアの地質学的・考古学的発掘調査において、旧石器資料が蓄積されている。ネアンデルタールとサピエンスの交替劇に関する資料は、カルガ間氷期 (OIS-3: 約6-2.5万年前) に形成された埋没古土壌層に含まれる、中部旧石器と上部旧石器初頭の石器群である。ここでは鍵となる遺跡の概略を紹介する (図1)。

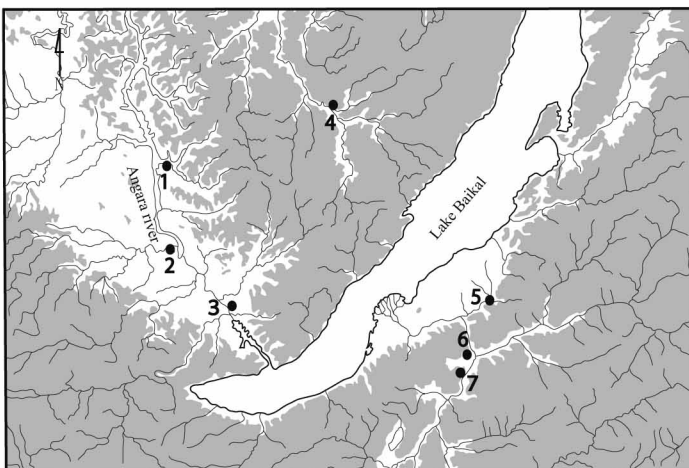
2. 中部旧石器

ヨーロッパや西アジアではネアンデルタール人骨を伴うムステリアン石器群は、バイカル・シベリアには明確な典型例は知られていない。西のアルタイ山地とエニセイ川流域、南のモンゴルでは洞穴遺跡・開地遺跡ともにムステリアン石器群が確認されているので、本地域でも今後の発見が期待される。現状では、古環境

イベントとの対比の上で妥当性の高い年代測定値のある堆積物中から、既知の上部旧石器とは異なりムステリアンに類似する要素が認められる石器群が検出されると、中部旧石器と位置づけられている。

こうした条件に近いシャーボヴァ遺跡はアンガラ川右岸の開地遺跡で、ムルクタ寒冷期 (OIS-4) の堆積物と、カルガ間氷期初期の堆積物との境界面 (第5a-6層) から、385点の石器と25点の動物遺存体、1点の石製装飾品が出土した (Козырев и Слагода 2008)。火成岩と珪岩を主体に、厚手の剥片を素材とした削器類、平面三角形の剥片に二次加工を加えたムステリアンポイントに類似する尖頭器などが、ムステリアン的な特徴を示している (図2下段)。石刃や石刃素材の彫器は不在である。ただし剥片剥離技術は原石の自然面を打面とする簡略なもので、ルヴァロワ技術は認められない。14C年代は約4万年前である。人骨を伴わないので、石器群を残したのがネアンデルタールか否か不明ではあるが、アルタイ山地の諸遺跡では、中部旧石器

図1 言及する遺跡の位置



- 1 : バリショイ・ナリン遺跡、イギテイ山遺跡
- 2 : マリタ遺跡
- 3 : アレンボフスキー遺跡、シャーボヴァ遺跡、陸軍病院遺跡、ゲラシモフ1遺跡
- 4 : マカロヴォIV遺跡
- 5 : ホティク遺跡
- 6 : カーメンカ1遺跡
- 7 : ワルワリナ山遺跡

時代のシベリアでも複数の伝統が成立していた可能性が示されている (Деревянко и др 2003、Derevianko et al .2005)。

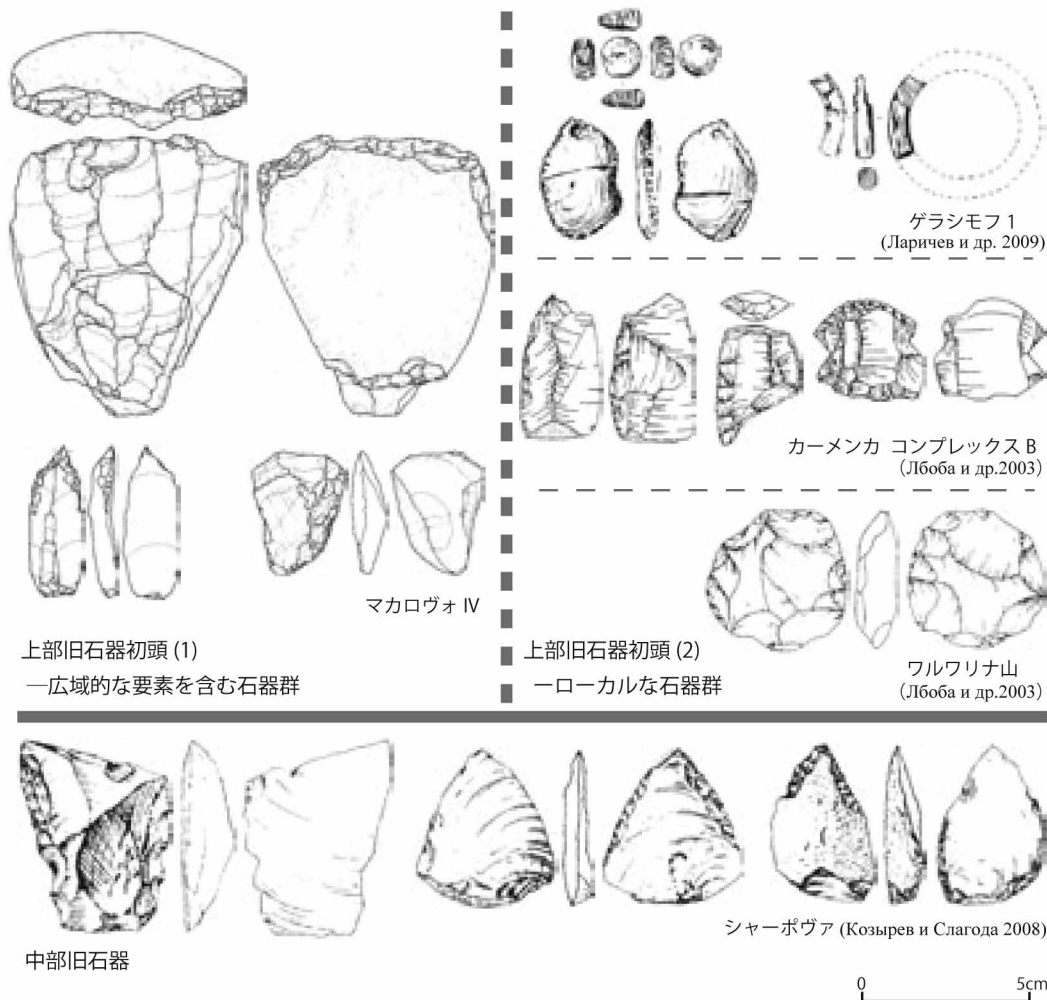
伝統的にシベリアの旧石器研究では、各地のローカルな中部旧石器から上部旧石器が連続的に成立したとする、いわば人類進化の多地域進化説に近い立場が主流であった (加藤2003)。この観点は、今日的な遺伝学やヨーロッパの旧石器研究、本プロジェクトの交替劇とは方向性が異なる。その背景には、中部旧石器と上部旧石器の両特徴を併せもつ石器群が認められてきた経緯がある。しかし堆積物や包蔵される人工遺物の分布には、凍結融解や氷成擾乱による変形が激しく、「文化層」や「生活面」を判断しがたい遺跡が多いことや、人工遺物の一括性が評価しがたい事情にも注意する必要がある。

3. 上部旧石器初頭

(1) 広域的な要素を含む石器群

アレンボフスキー遺跡はイルクーツク市郊外の開地遺跡で、氷成擾乱や酸化鉄を含む古土壌層から10,000点以上の石器資料が出土した(Семи́н и др.1990)。動物遺存体や年代測定の見解はないが、石器群を含む堆積物の特徴から、3万-2.5万年前と推定されている。泥岩の板状原石を石核の素材として山形の打面調整を行い、石核の片面で石刃を連続的に生産する平行剥離の扁平石核と、求心剥離の円盤状石核が卓越する。石刃を素材として端部のみ、あるいは端部と一側縁に二次加工を加えた搔器は上部旧石器的な特徴である一方で、中部旧石器的な剥片素材の頑丈な削器も認められる。マカロヴォ IV遺跡

図2 バイカル・シベリアの中部旧石器～上部旧石器初頭石器群



も同様に、扁平石核からの平行剥離で石刃を生産する石器群である。レナ川の開地遺跡で、5層とその直下から4000点以上の石器群を検出した(Аксенов и Шуньков1978、Медведев и др.1990)。石器群を産出する堆積物の年代は4万年前よりも古いと推定されている。石核・石刃ともにアレンボフスキー例よりも小さく、剥片や石刃の縁辺に二次加工を施した小型の削器や石錐といった上部旧石器的な剥片石器が、より顕著に表れている(図2左上)。いずれもルヴァロワ石刃と類似した石核リダクションに特徴があり、さらに中央アジア(テシク・タシュ遺跡)や西アジア(クサル・アキル遺跡)、中国華北(水洞溝遺跡)に及ぶ広域に分布した、「カラボムスキー・プラスト」石器群(Деревянко и др.1998、折茂2002)と共通する。確実な年代測定例は限られるものの、カラ・ボム遺跡の年代測定からこの広域拡散は約4万年前と推定されており、年代的には後述するオーリナシアンよりも古い可能性がある。

この広域拡散の主体がネアンデルタールなのかサピエンスなのか、あるいはどちらでもない第3のホモなのか、現時点では人骨の共伴出土例が不在なので明らかではない。しかしながら、オーリナシアンとは年代や拡散範囲、石器群の特徴が異なる、同じように広域に拡散した石器群がOIS-3に存在した証拠がある点は、交替劇を考える上で興味深い。

4. 上部旧石器初頭 (2) ローカルな石器群

これらとは異なる、おそらく本地域のローカルな上部旧石器初頭の石器群が現れている例が、2007年に調査された開地遺跡のゲラシモフ遺跡である。カルガ間氷期とサルタン氷期(OIS-2)の間に形成された7層から、石器1481点、動物遺存体2877点が出土した。堆積物の特徴と14C年代から、3万-2.3万年前と推定されている。石器群は石英や珪岩の厚手剥片を素材とした削器類、両面石器が特徴的で、小石刃を剥離した石刃核も出土している。ビーズ、腕輪、垂飾など5点の装飾品(図2右最上段)がある(Ларичев и др.2009)。

フリント質ではない頑丈な物性の石英や珪岩を用いる点、円盤状石核が目立つ点、中部旧石器的な削器類が目立つ点は、ビーズや垂飾などの装飾品を伴うこともある点(Деревянко and Rybin 2005)、アンガラ川流域(陸軍病院遺跡、イギテイ山遺跡、バリショイ・ナリン遺跡採集資料など)や、バイカル湖対岸のザバイカル地域(ホテイク遺跡、ワルワリナ山遺跡、カーメンカ

1遺跡コンプレックスBなど)(Лбоба и др.2003など)で、3万年前後の年代が与えられている遺跡に共通する特徴である(図2右中段)。

なお上記(1)の広域的な要素を含む石器群と、(2)のローカルな石器群との年代的な新旧関係は、現時点では未確定である。(1)の広域的な要素をもつ石器群は、盤状の石核リダクションを中部旧石器のルヴァロワ技法に関連させるならば古く評価できる一方で、石刃素材の剥片石器類は上部旧石器的である。(2)のローカルな石器群は、厚手の削器など石器群の要素は中部旧石器的であるが、装飾品はサピエンス的である。両者の新旧関係や同時共存を確定するには、地学的に確実な層位的出土と数値年代の蓄積が決め手となる。

5. 西方的な上部旧石器

発達した骨角器や可動芸術など、現代人的な行動様式で3.5万年前からヨーロッパと地中海沿岸に分布域を拡大し、複数の遺跡でサピエンス人骨と共伴する石器伝統であるオーリナシアンに関連する石器群は、アルタイ山地で一部指摘されるが(Otte and Derevianko 2001)、バイカル・シベリアでは典型例は知られていない。オーリナシアンが拡散した頃の本地域には、ネアンデルタールかサピエンスかは不明であるが先述(1)の広域的な要素をもつ石器群や、(2)のローカルな石器群を残した人類集団が居住していたと考えられる。これらの石器群の中で、石器製作技術の特徴や要素が、後続する上部旧石器のある時点で途絶える=異なる石器伝統に置き換わるのか、それとも上部旧石器時代の全体を通じて継続されてゆくのか、考古学的な課題である。

ヨーロッパでオーリナシアンに後続したサピエンスの石器伝統であるグラベティアンに関連する遺跡として、本地域には著名なマリタ遺跡がある。継続的に発掘調査されている開地遺跡で、住居状遺構が連なる「集落」や幼児埋葬、ヴィーナス像をはじめ多数の象牙製・骨角製可動芸術が出土している(Medvedev1998)。石器製作技術は、先述したローカルな上部旧石器初頭の石器群とは異なるフリント質の石材を選択し、クサビ形やプリズム形核から生産した石刃・小石刃を素材として、搔器、彫器、石錐を量産する。年代は多数の14C測定例が2万年前にまとまる(Каницкая и Когай 2007)。高度な骨角加工や多様な象徴遺物は、寒冷地への現代人的な環境適応の代表例で、交替劇の終了後の姿といえよう。

6. おわりに

他にも重要な遺跡は多いものの、限定した紹介にとどまった。まずはローカルな中部旧石器の地域的なまとまりをつかみ、石器伝統(インダストリー)を定義・把握することが望まれる。これによりローカルな上部旧石器初頭の、つまりネアンデルタールの可能性を残す石器群と、そうではなく西方の中央アジアやヨーロッパと共通する、新たに進出してきたサピエンスである可能性がある石器群との違いを明確にできれば、共伴人骨の少ない当地域においても、交替劇の学習仮説を実証的に検証する手がかりが得られるものと考えている。

<引用文献>

- Аксенов М.П., Шуньков М.В. 1978 Новое в палеолита Верхней Лены (предварительные данные об исследовании Макарово IV). *Древняя история народов Юго Восточной Сибири вып 4*, 35-55. Иркутск.
- Деревянко А. П., Петрин В.Т., Рыбин Е.П., Чевалков Л.М. 1998 *Палеолитические комплексы стратифицированной части стоянки Кара-Бом* (мустье – верхий палеолит), 1-279. Новосибирск, Издательство Института Археологии и Этнографии, Российская академия наук Сибирское отделение.
- Деревянко А. П., Шуньков М. В., Агаджанян А. К., Барышников А. П., Малаева Е. М., Ульянов В. А., Кулик Н. А., Постнов А. В., Анойкин А. А., 2003, *Природная среда и человек в палеолите горного Алтая: Условия обитания в окрестностях Денисовой пещеры* 1-448. Новосибирск, Издательство Института Археологии и Этнографии Российской академия наук Сибирское отделение.
- Derevianko A.P., and Shunkov, M.V. 2005 Formation of the Upper Paleolithic Transitions in the Altai. Derevianko A.P., (ed.) *Discussion: The Middle to Upper Paleolithic Transition in Eurasia Hypothesis and Facts*. Archaeology Ethnology and Anthropology of Eurasia 283-311.
- Derevianko A.P., and Rybin, E.P. 2005 The Earliest Representation of Symbolic Behavior by Paleolithic Humans in the Altai Mountains. Derevianko A.P., (ed.) *Discussion: The Middle to Upper Paleolithic Transition in Eurasia Hypothesis and Facts*. Archaeology Ethnology and Anthropology of Eurasia. 232-255.
- Каницкая Н. С., Когай С. А., 2007, К проблеме группирования данных абсолютного возраста культурных отложений плейстоцена и голоцена Байкальской Сибири. Медведев, Г.И. (ed.) *Антропоген: палеоантропология, геоархеология, этнология Азии*. 67-75. Иркутск, Издательство Отгиск.
- 加藤博文2003「シベリアにおける後期旧石器時代初頭の文化」『日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集後期旧石器時代のはじまりを探る』68-73. 愛知、日本旧石器学会
- Козырев А. С., Слагода Е. А., 2007, «Щапово» - Новое геоархеологическое местонахождение верхнего плейстоцена в г. Иркутске, *Антропоген: палеоантропология, геоархеология, этнология Азии*, 81-89. Иркутск, Издательство Отгиск.
- Ларичев В. Е., Липнина Е. А., Медведев Г. И., Когай С. А., 2009, Ангарский Палеолит: у истоков «художественного творчества» ранних Homo Sapiens Восточной Сибири и начало обретения ими протонаучных знаний о природе. *Вузская научная археология и этнология Северной Азии. Иркутская школа 1918-1937 гг.* 249-264. Иркутск, Издательство «Амтера».
- Лбова Л. В., Резанов И. Н., Калмыков Н. П., Коломиец В. Л., Дергачева М. И., Феденева И. К., Вашукевич Н. В., Волков П. В., Савинова В. В., Базаров Б. А., Намсараев Д. В., 2003 *Природная среда и человек в неоплейстоцене (Западное Забайкалье и Юго-восточное Прибайкалье)*. 1-206. Улан-Удэ, Издательство Бурятского научного центра Российской академия наук Сибирское отделение.
- Медведев Г.И.Савельев Н.А.,Свинин В.В.1990 Стоянка Арембовского. *Стратиграфия, палеогеография и археология Юга Средней Сибири К XIII Конгрессу ИНКВА*. 57-70. Иркутск, Российская академия наук СССР Сибирское отделение.
- Medvedev G.I. 1998 Upper Paleolithic sites in south central Siberia. Derevianko A.P. (eds) *The Paleolithic of Siberia: New Discoveries and Interpretations*. 122-137. Chicago, University of Illinois Press.
- 折茂克哉2002「東アジアにおける中期～後期旧石器初頭石器群の変遷過程」『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』国立民族学博物館調査報告33、23-47. 大阪、国立民族学博物館
- Otte M., Derevianko A. 2001 The Aurignacian in Altai. *Antiquity* 75, 44-49.

Семина М., Шелковая С.О., Чеботарев А.А. 1990 Новое
Палеолитическое местонахождение в Г.Иркутске(имени
И.В.Арембовского). *Палеоэтнология Сибири*. 114-115.
Иркутск, Иркутск йГосударственный университет.

『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究』 1
－「交替劇」A01班2010年度研究報告－

発行日◎2011年8月1日
編集◎西秋良宏（「交替劇」A01班研究代表者）
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学総合研究博物館 TEL.03-5841-2491
発行◎文部科学省・科学研究費補助金「新学術領域研究」2010-2014
研究領域名「ネアンデルタールとサビエンス交替劇の真相：
学習能力の進化に基づく実証的研究」
領域番号 1201 A01班
印刷・製本◎秋田活版印刷（株）
〒011-0901 秋田市寺内字三千刈110-1 TEL.018-888-3500